

学園史のなかの「限界芸術」

～桜美林学園の資料が伝える、変わらない遊び心～

大絵 晃世

はじめに

0-1 研究の背景

学校法人桜美林学園は東京都町田市に拠点を構える幼稚園、中学校、高等学校、大学、大学院を設置するキリスト教主義の学園である。桜美林学園の前身である崇貞学園¹から数えて2021年で創立100周年を迎える。

私は2017年より桜美林大学芸術文化学群に専任助手として所属し、2021年現在は学園史編さん室の専門調査員として100周年に向けた資料収集や学園史発刊に向けた編集に携わっている。そこで学園史に関わる資料を調査・閲覧するなかで、学園史としての興味もさることながら、学園内で行われている様々な行事や創作物を見るうちに、一つの「文化」として惹かれるものがあった。100年という長い期間における各時代の資料からは、「遊び心」のような感覚が一貫して感じられるのだ。例えばクリスチャンスクール特有の手作り感溢れる行事や、独自性のある文化祭・体育祭、創立者である清水安三の面白い身振りや言葉遊びなど、学園史を眺めているとその全体から、銜いのないさやかな楽しさと、ユーモア溢れる日常風景が伝わってくる。

筆者の専門は美術であるが、筆者はこれまで「美術」の概念を広げる研究をしてきた。それは筆者の興味が、狭義の「美術」よりも、日常における様々な表現に置かれていたからだ。そこで筆者が研究してきたのが、様々な創作物等を広く文化論として捉えられる「限界芸術² (Marginal Arts)」という概念であった。「限界芸術」は、戦後文化論の批評家・鶴見俊輔（1922-2015）が1960年代に提唱した概念である。この、「限界」の語が意味するのは鶴見自身が示した英訳によると「marginal」を意味し、高尚な芸術に対して「隅の」「端の」を意味する。「芸術」という呼び名が付くと近寄りがたさがあるが、この限界芸術が指すものは民芸品や農作業、祭などに代表される日常において生まれてくる創作物や、駄洒落などの言葉遊びまで広く含むものである。

学校史の資料における面白さというものは全国どこにでもあるはずであるが、本論においてはそこで筆者が偶然出会った桜美林学園という存在から、その一辺を紹介し、この「限界芸術」という視点で考察する。理由の一つとしては、桜美林学園が思想をもつ教育組織であり、限界芸術論で重要視されている「宗教性」と深く関わりがあるためだ。ここで生まれてくる独自性のある学園史資料は、その巡りゆく一年一年の学事暦のなかで、作られてはその場で消えていくエフェメラルの創作物や行事の一つ一つの記録であり、日本の文化を支える上でも貴重な文化的資料そのものであることを認識できるのではないかと思う。

鶴見が限界芸術について著した『限界芸術論』（以下、鶴見書）の後に限界芸術について研究した書物は、福住廉著『今日の限界芸術』や、栗谷佳司『限界芸術論と現代文化研究：戦後日本の知識人と大衆文化についての社会学的研究』などがある。これらの文献において、限界芸術はさらに広く捉えられ、SNS、手紙、ポップミュージックなどの分析において、限界芸術の概念を利用して考察しつつ現代的に再解釈を行い、この概念の捉え方を押し広げる形となっている。筆者の博士論文『「限界性」の芸術：内的価値、贈与、時間にむすびつけて』では、限界芸術から「限界性」という性質を取り出す作業を行なった。

これらを踏まえると、限界芸術を教育機関における文化と結びつけて語られる文献はまだ見かけられない³。よって本論では人の人生において長い時間を過ごす幼稚園から大学における教育機関における創作物を一つの文化として捉えるため、一つの事例として桜美林学園の資料を元にしながら検証していきたい。

0-2 限界芸術について

学園史の資料の内容について見ていく前に、本論における「限界芸術」の概念の捉え方について明確にしておく。鶴見書によると、限界芸術は「非専門的表現者によって表現され、非専門的享受者によって享受される」と定義される。つまり、大衆芸術などのように不特定多数に共有されるものではなく、身の回りの人たちのために作られ、楽しまれる芸術ということになる。また、「芸術」と名が付いてはいるが、冒頭にも述べた通り、様々な行動の種類を範疇としている。例えば鶴見書より表1のように行動の種類に対応する限界芸術が説明されている。

表 1 「芸術の体系」『限界芸術論』p70より

芸術の体系			
芸術のレヴェル 行動の種類	限 界 芸 術	大 衆 芸 術	純 粋 芸 術
身体を動かす →みずからのうごきを感じる	日常生活の身ぶり、労働のリズム、出だめ式、木やり、遊び、求愛行為、拍手、盆おどり、阿波おどり、竹馬、まりつき、すもう、獅子舞	東おどり、京おどり、ロカビリー、トワイスト、チャンバラのタテ	バレエ、カブキ、能
建てる →住む、使う、見る	家、町並、箱庭、盆栽、かざり、はな、水中花、結び方、積木、生花、茶の湯、まゆだま、墓	都市計画、公園、インダストリアル・デザイン	庭師のつくる庭園、彫刻
かなでる、しゃべる →きく	労働の相の手、エンヤコラの歌、ふしことば、早口言葉、替え歌、鼻唄、アダナ、どどいつ、漫才、声色	流行歌、歌ごえ、講談、浪花節、落語、ラジオ・ドラマ	交響楽、電子音楽、謡曲
えがく →みる	らくがき、絵馬、羽子板、おしんこざいく、風絵、年賀状、流燈	紙芝居、ポスター、錦絵	絵画
書く →読む	手紙、ゴシップ、月並俳句、書道、タナバタ	大衆小説、俳句、和歌	詩
演じる →見る 参加する	祭、葬式、見合、会議、家族アルバム、記録映画、いろはカルタ、百人一首、双六、福引、宝船、門火、墓まいり、デモ	時代物映画	文楽、人形芝居、前衛映画

例えば一番上の「身体を動かす」という行だが、純粋芸術が「バレエ」「カブキ」とあることに対して、限界芸術では、「日常の身ぶり」「労働のリズム」「遊び」などが書かれている。また、「かなでる、しゃべる」の行では、純粋芸術が「交響曲」に対応し、「早口言葉」「アダナ」なども含まれる。

広く言えば「人生そのものが芸術である」という見方を鶴見書でも検討しているように⁴その生きることそのものが芸術として高まるとするならば、いかに人と人との関係の中でより良く、より美しく、より面白く生きられるかということを問うている概念ともいえる。小さなコミュニティの中に存在し、そこで楽しまれる「芸術」とであると捉えられる。

また、鶴見は本学の創立者の清水安三と直接の関わりはないが、遠巻きに関係していることもここに明らかにしておく。例えば、鶴見俊輔は柳宗悦の研究もしており、『限界芸術論』においても、柳宗悦を限界芸術の「評論家」としている。この柳宗悦による「民藝運動」の一環によりできた「日本民藝館」は、1章で述べる、崇貞学園・桜美林学園を経済的に支援した大原孫三郎の支援を受けてできたものである。また安三が卒業し、講師を務めた同志社大学だが、晩年(1975年)に名誉神学博士号を授与された同じ頃、鶴見俊輔は同大学で「新聞学」の教鞭をとっていた。そのように清水安三と鶴見俊輔は重なる時代を生き、遠回しに少しずつ関わりをもっている。

本論の構成は以下である。一章では、創立者清水安三（以下、安三）について取り上げ、学園全体が大きく影響を受けている彼の思想と「ユーモア」について説明する。二章では、限界芸術がもっとも高まる形としての「祭」を取り上げ、その表現の幅の広さについて紹介する。三章では、学園の中で作られてきた特に独自性の高い様々な制作物について見ていく。文化を俯瞰するより、自分が出会った足下のものから考察するという鶴見の考えにのっとり、私が偶然にも出会い深く関わることになった桜美林学園（崇貞学園）という存在のなかで、その特に興味深い限界芸術を以下に見付けていきたい。

1 創立者、清水安三のユーモア

桜美林学園の創立者清水安三（1891-1988年）（以下、安三）については滋賀県高島市に生まれ、同志社大学卒業後、宣教師として中国に渡り、北京の貧民街に崇貞学園を創立した。戦後、日本に引き揚げた後に崇貞学園の後身としての桜美林学園を創立した。戦前は、北京週報や國民新聞などで多くの記事を執筆し、また戦後にも通じて多くの著作を著し文筆家としても著名である。その一方で、ユーモア溢れる逸話も多く残されており、それが本学園の雰囲気にも多分に影響していると考えることから、まずは以下にみていきたい。

1-1 嘘と言葉遊び

最初に触れておきたいのが、安三の「言葉遊び」についてである。多作である安三が著した著作には常にユーモアと言葉遊び（語呂の良いタイトルなど）を感じさせるものが多いが、その中でも興味深いのは、彼がよく「嘘」を付くところだ。自身でも、安三の「安」をとってしばしば「ホラ安」と称している。鶴見書では「ホラ吹き of 限界芸術⁵」という言い方もしており、嘘も面白いものとして認めている。学園誌『復活の丘』のコラムなどでも、「大話」（中国語で嘘を意味する）というコラム欄で、学園の未来について夢を語るという「嘘」をついていると書いている。また、安三著『支那の心』にも、「嘘は支那では、大切な、社交の工具である⁶」とも言っている。その中で最も大きな嘘と呼ばれたものは、後に事実になることもあった。

例えば、崇貞学園を創立する前、安三が中国に向かう前、新聞のインタビューで「ボクはシナへ行って、20歳代には小学校を、30歳代には中学校を、40歳代には高等学校を、50歳代には大学を立てるつもりです⁷」と、「吹いたホラを、吹いたとおりに書いてくれ」て大阪朝日新聞に掲載されたと言っている。大学こそ日本での開学となったものの、ほとんど予告通りになっているところは驚きを禁じ得ない。

また、嘘が実現してしまった例はこれにとどまらない。1950年代前半のこと、後に校舎を寄進することになるチャブレン・サレンバーガーが初めて桜美林学園にやってきた。当時は寄宿舎を校舎として使用していたため、寄宿舎ばかりで、教室が一つも見えないとチャブレンが言ったところ、次のようなやりとりがあった。（以下引用）

「校舎はあの丘の上にあります」

と言ったら、チャブレンは復活の丘の上をあちこち眺めた後に、

「何もないじゃないかね」

と言って私を顧みたら、私はすかさず、

「貴君には見えませんか、僕の眼には、鉄筋コンクリートの校舎がずらりと並んでいる

のが見えるのだが……」

2、3日後にチャプレンは再び訪れて、「僕が土地を買って上げよう」と約束して帰ったという。⁸

このような、一種の「ジョーク」が功を奏して校舎が誕生したという話もあったのだ。

この「嘘」は安三の記録には間違いが多いことにも表れる。例えば年代や日付が間違っているのにも関わらず、「忘れもしない〇月〇日」や「その日は紛れもなく私の誕生日であった」と堂々と記載されていることがしばしばであるが、その多くが別の資料においては違う記載となっている。安三を研究対象としている研究者は多いのだが、こういった記述は研究者泣かせであり、筆者自身も年表を編集する上で相当に困惑させられている。特に重要な出来事を日付どころか年単位で間違えており、最も酷いものでは崇貞学園の創立年の「1年のずれ」という長年の問題もある⁹。

この記述について、間違っていることも芸術だというのは流石に暴論であるとは考えるが、主観的な記録の手法そのものがアートになるという一つの考え方もある。それはハル・フォスターによる「アーカイブ的アート¹⁰」などの考えにみられるが、記録する衝動そのものを広く芸術活動であると捉えるならば、このような間違いだらけの記録というものも、アーカイブ的アートの限界芸術とも捉えられる。また、間違えてはいないものの、想像が混ざっていることで魅力を増す記録というものも美術館で実践されている。例えば、宮城県気仙沼市のリアス・アーク美術館で実践されている事例だが、震災に関する展示において博物品にリアリティーをもたせるために、博物品から想像した物語をキャプションとして附属させているという事例などにみられる。博物品の展示方法としては不適切に思えるが、同美術館では震災と津波の歴史を実感してもらうために、想像力を掻き立てさせる内容を、あえてキャプションとして展示している。それについて、筆者の前述の博士論文の中では「想像を帯びた現実」という言葉を使用して触れた。記録が多少虚構的だったとしてもまさしく、安三の著作における回想記は「想像を帯びた現実」である。桜美林学園ではしばしば誇張や曖昧な記憶がそのまま学園史になってしまっているきらいはある。しかし、その時々回想が彼にとってのリアリティーであり、安三あるいは学園の中での歴史となり、決定的な断定ができないことも研究者を駆り立てている要素でもある。歴史には主観性の問題が付いて回るが、本学園においてはそれが顕著であり特徴的だ。

このような記録一つを取っても面白い部分があるが、言葉遊びに関しては、他にも多々事例がある。例えば、桜美林学園の旧校歌は信時潔の作曲による軍歌「海行かば」の「替え歌」である。鶴見書の中でも替え歌研究を限界芸術として文脈化する作業を行っている。特に軍歌の替え歌について言及しており、戦後の軍歌の替え歌には、劣等感やアメリカに対する皮肉がこもることに着目していた¹¹。桜美林の旧校歌では、戦時中の当時国民誰もが口ずさむことのできた軍歌を校歌にするという考えを元にしており、内容は、校歌にふさわしく校地について礼讃する内容で、特に2番には「日の本を再び建てる 大し力を」と戦後の日本の再建への願いを込めている。この「海行かば」の替え歌の校歌は、甲子園出場を意識して1958年に新しく作曲されたものになったが、旧校歌は今でも同窓会などで歌い継がれている。

加えて、本学の名称「桜美林学園」も、町田の土地を視察後に創立者夫人の清水郁子が風呂場で思いついたものとして有名である。「桜の木の中に建物が埋まっている」状況を目にし、「Oberlin College」の「オベリン」と桜の美しい林を掛けたわけである。校名そのものにも駄洒落が混ざっており、言葉遊びなのである。このように、安三の嘘に始まる発言にとどまらず、校歌、校名など様々なところに安三たちの学校に対する想いと、遊び心が通じている。

1-2 身振り・手振り

多くの人を惹きつけてきた安三の面白さは、言葉の表現だけにとどまらない。時には生徒への叱咤さえも、ユーモア溢れる「手振り」で表現した。

崇貞学園時代の元生徒の回想記より、以下引用する。

或る日の事、寮で「集まれ」の厳しい安三先生の怒り声でおそろゝ、皆食堂に集まりました。掃除の点検でした。雑布がけしてない窓の棧や電灯傘の上のごみを御覧になって、指先で拭いてなめながら「これはきれいでおいしい物だから拭かないのか？」又水をやらなかったから枯れてしまった花瓶の中の枯花や植木鉢の菊の花を御覧になって、「これもきれいで美しいからこうした方が良からう」とおっしゃって、私達の胸に頭髮に一本々々折って挿して下さったのです。私達は恥ずかしいやらおかしいやらでクス、笑う人、顔を見合わせて脅える人も居りました。ひどく叱られるより却って深い反省を促されました。(中略)あとで先生は笑いながら種あかしをして下さいました。人さし指でこすって中指をなめたそうです。¹²

普通に叱咤するのではなく、そこに「笑い」をしのばせ、生徒に深く印象づける方法はさすが教育者である。

こういった身振り・手振りを「パフォーマンス」として広く捉えるならば、後年、桜美林学園においても、自らが仮装して学生たちを楽しませる一面があるなど(第二章にて後述)、いかに周囲の者たちを楽しませるかをいつも考えているような人物であったことが様々な資料から伝わってくる。例えばそれは次節にみる「観光案内」においても発揮されている。

1-3 観光案内

それは、実業家の大原孫三郎の中国視察において、安三が観光案内を行ったときの逸話である。大原孫三郎といえば、学園を経済的に支援した縁の深い人物であるが、大原の生涯で唯一の旅行であった中国の案内をしたのが安三であり、この出会いをきっかけとしている。『大原孫三郎傳』によると、1923年3月26日からの中国視察で、紡績事業の進出に関する視察だった。北京の駅で大原を安三が出迎えたが、取締役の山内という者が中国語のよくできる者を準備しているということで断ったが、大原孫三郎は、清水に案内させるとしたらどういうふうに案内するかを尋ねた。以下、引用する。

(引用文)すると清水は、かねて用意していた、三日案、一週間案、十日案の三種の視察日程一覧表を差出した。それには名所旧跡だけでなく、大学、劇場、仏寺、堂廟、公園はもちろん、中国の各層の家庭訪問、遊郭などの視察も盛られ、更に阿片窟、阿片の解毒治療所、貧民の娯楽場、書籍店、いろいろの骨董品店も案内することになっており、大学教授、学生にも引合せたい旨も答えた。これを見ると孫三郎は直ちに「山内君、僕は清水君に案内してもらうことにする」と決めてしまった。¹³

ここでも安三の、いかに人を楽しませるかという気概を感じとることができる。安三は中国の様々な生活階級に対する眼差しを常にもち、一般的な観光で訪れられるはずもない場所を準備していたのだった。その後も大原孫三郎との交流は続き、大原の援助で安三と同じく創立者

であり妻の清水郁子が渡米した他、現在でも桜美林学園と同紡績業（大原記念労働科学研究所）は産学連携を行うなど、その関係性は今日にまで及んでいる¹⁴。

安三の言動や行動には、商売人であること以外に、相手にどのように伝えるかという教育者としてのホスピタリティ精神も感じられる。商売人に偏っていることを理由に、同志社大学を退職になったというエピソードがあるが（晩年、同大学から名誉博士号を授与する）、学校経営とは、教育者であると同時に経営者としての視点も同時に必要である。松下幸之助は「経営は生きた総合芸術である」といっているが、これは限界芸術論の視点でいえば、まさしく近いことをいっている。すなわち、経営における発想の豊かさや伝え方、細部の工夫などは、それ自体が限界芸術といえるのだ。

1-4 小さなコミュニティー

これは「芸術」と名を付けるには憚れるかもしれないが、安三が提案した「双葉会¹⁵」というものが興味深い。当時崇貞学園には、日本人、中国人、当時でいう朝鮮人等が通っていたが、別の国の生徒とペアになって、在学中の大親友を作るという制度だ¹⁶。

以下に、双葉会に関する説明を清水安三著『支那人の魂を掴む』より引用する（旧漢字は新漢字に修正）。

私の経営する崇貞学園には漢民族、満州旗人、回々（※筆者註：イスラム教）、半島出身、内地生れ（※筆者註：日本生まれ）の五民族もの少女達が学んでゐる。

学園では双葉会といふ会作つて、凡ての女学生は最も親しむべき友を、自分と異なる民族の生徒から一人見出して、『相好（シアンハオ）』として持つてゐる。恰も二回羽状の複葉の葉つばの如くに。

時には彼等は、自分の民族特有風俗なる着物をそのお友達に着せて、自分は支那服着たりしてゐる。

双葉会の遠足には、二列になつて、他民族のお友達と手をつないで歩き行く、二週間ばかりのお休みにすら、泣いて相別れるものすらある。

と、五民族が共に文化交流をしていた様子で、それも相当仲の良かった様子が伺える。当時の背景としては、中国に來ている当時でいう朝鮮人たちは母国語を喋ることもできず、国花である「木槿」さえも知らなかった。それを安三は、一人一人に教え、また生徒の名前も母国の名前で呼んだという。このような国際理解に努める教育方針と、時代背景にも依らずこのような企画を作ることは先見の明である。

一見、双葉会の活動のようなものは、「限界芸術」とはかけ離れているように見える。しかし前述の鶴見書には、二人という小さなコミュニティーについて言及している部分がある。鶴見がアメリカの学校にいた頃、友人から「ユア フェイマス セイイング（君の有名な言葉によると）」と言われ、その英語の使い方に驚いたという。それについて、「二人の友人のコミュニケーションにとってでも名高いことがあり、その上に何かかきずかれる。」といている。二人とは、コミュニティーの最低の単位だが、このような他民族間での小さなコミュニティーが、やがて大きなコミュニティーへとつながっていくことが、安三には見えていたのだと思う。このような意識的なコミュニティー形成は現代芸術の文脈でも「リレーショナルアート」や「地域アート」の考え方などとも結びつけられるだろう。このようなアートの取り組みのなかでも、地域活性や街づくりのために関係性を築く取り組みが行われているが、安三は自然と現代においても必

要とされるものを当時実行していた。それも後述するように、崇貞学園において生徒たちの技術を向上させることによって、最終的には手工芸の産地として活性化している点は見逃せない。

1-5 郁子人形

安三の後妻である清水（小泉）郁子は、女性教育の先駆者であり『男女共学論』の執筆者としても有名である。お茶の水女子大学には人文社会学に貢献した女性研究者に与えられる「小泉郁子賞」が設けられていることにみるように、女性教育に関する功績は顕著であった。前身の崇貞学園の時代より校長や学園長を歴任し桜美林学園を支え続けた人物であった。

戦前から長く安三を支え続けてきた郁子だったが、安三が長年目標としていた念願の大学の設置が認可されたとき、残念ながら郁子はすでに亡くなっていた。その認可を一緒に祝福するかのように、等身大の張りぼて人形に生前の郁子が着用していた「一張羅の外套」を着せ一緒に写真を撮ったのが「郁子人形」だ（図1）。安三と共にこの人形も胴上げされたという。また、後に経済学部が認可されたときも、再び郁子人形を制作している（図2）。この人形自体も限界芸術であるといえるし、隣で撮影したこの行為そのものもまた然りである。



図1（左）桜美林大学設立認可内示の際のグラウンドでの祝い 1965年12月27日
清水安三記念プロジェクト写真資料

図2（右）経済学部認可を祝福する郁子人形と清水安三 1968年 学園史編さん室所蔵資料

加えて、人形ではないが遺品として安三の爪と髪の実物や、一般的な写真資料群の中にデスマスクの近影が残っていたりなど、資料整理の際に作業員を驚かせることもしばしばである。このようなことから、私の所感であるが、崇貞学園および桜美林学園は「死」と共存しているように感ぜられる。それは、北京の大旱魃¹⁷で苦しむ人々を救った崇貞学園の前身である「災童収容所¹⁸」に始まり、貧民街の少女たちを救ったところから始まった崇貞学園も同様であるし、桜美林学園においても戦後の東京の焼け野原で中国から一文無しで引き揚げてきた清水夫妻が神に祈るところから始まった。まさしく、人間の生と死に関わるどん底の状態から不死鳥のごとく生まれた教育組織だ。例として被災地で生き残った人々が、死をばねに活力が増し、逆転して活気・生命力が増すという話があるが、同じような気魄を感じる。

また、安三単独としても目の前で死にかけた人を救ったという話がいくつか清水安三の著書『朝暘門外』で出てくる。この物質主義中心の世界では、死の世界というものは物質の介在しない世界として「無」を表すが、安三が生きてきたキリスト教的世界観では、死後の世界が明確に示され、「死」というものに向き合い、そして生き方を考えるという死の世界との連続性

がある。学園史を調査していると、このような「死」との連続性について考えさせられざるを得ない。現代社会では「死」というものは、生きることと切り離され、覆い隠したくなるものであるが、こういった表現をみると桜美林の学園史では生と死が豊かに行き来していることがわかる。

1-6 思い出の再現

前述した、戦後、清水夫妻が中国から引き揚げて来た際の出来事であるが、そのとき夫妻は焼け野原にて「神よ、日本を再び建てるために私共をお用い下さい。神もし用い給うならば、私共は中国ですりへらした残滓のような体ではありますが、身を粉にして働きます¹⁹」と、涙を両頬にぼろぼろ伝えながら、長い祈りをしたという。この引き揚げ時の様子については、後に何度か再現されているため、紹介したい。

図3が引き揚げ時の様子の写真である。古い写真で、一見引き揚げ時にまさしく撮られたものであると思ってしまうが、実はこれは数年後にわざわざ再現したものである。

また、この時の様子は、桜美林学園の体育祭の仮装行列でも再現されており、清水夫妻にとって思い出深いものであると同時に、学園の再出発として、学園史としても意義深いワンシーンであることを物語る。仮装というと誰か別の人物になりきるわけだが、自分たちの様子を再現している点が面白い。



図3（左）引き揚げ当時に再現した写真 清水安三記念プロジェクト写真資料

図4（右）「体育祭の仮装」清水安三記念プロジェクト写真資料

このように清水安三のユーモアは、言葉、人形、仮装、など様々な媒体で表現されてきた。それは学園のために表され、学園関係者によって享受されてきた一つの「限界芸術」であった。このような、何気ない日常を面白くしてしまう安三の心意気のようなものは、学園の雰囲気を作ってきたように感じる。次に、本章の最後でも触れた体育祭などの「祭」にみられる独自性についてみていく。

2 祭・イベントの独自性

桜美林学園の祭においては、豊かな表現活動が行われている。そもそも祭の種類が多く、ざっとここに列挙するならば、一般的な学園祭（大学祭、文化祭）や体育祭の他に、「納涼祭」「桜祭」「桜美林東京クラブ（同窓会）」「6月祭」「ときわ祭」「スポーツフェスタ」「クリスチャンフェスティバル」「GALA オビリン」「うえるびりんフェスタ」「春節を祝う会」など様々な祭が存在している。

祭は、限界芸術の「集大成」として鶴見書で重要視されているが、筆者も祭で表現される創作物などについて重要と考え、度々扱ってきた²⁰。鶴見は、「祭がつよく生きているかどうかは、それぞれの時代における限界芸術の創造性のバロメーターになる²¹」といている。特に教育組織においては、カリキュラムと関係のない「祭」において、自主性や創意工夫が現れ、その学校の特徴が自然と滲み出てくるものだからである。以下に、桜美林学園において、特に興味深いと思われる祭やイベントのなかで作られる創作物などを紹介する。

2-1 生誕劇

桜美林幼稚園では、年に1回クリスマスの時期に、園児たちによるイエス・キリストの「生誕劇」を行っている。これは多くのキリスト教の幼稚園で「降誕劇」や「聖誕劇」といった名称でイエス・キリストの降誕を園児たちが演じる遊戯会の題目である。身近な物で工夫を凝らしてクリスマスに合わせて作り上げる劇は、小さな祝いの形であり、限界芸術の一つの高まりの形であると言える。幼稚園から寄贈を受けたVHSで動画を閲覧したかぎり、聖天使ガブリエルの長いセリフは、5人の役者で分けて喋るなど、オリジナル性も高い（本来は聖天使ガブリエルは1人）。また、園児による独特の節回し（園児特有の文節で区切ったような話し方）によってセリフが発される。鶴見は節回しも限界芸術であるとしている。ある程度パターン化されたものが毎年上演されているわけだが、少しずつ時代によって表現を変えて現在に至っている。また、言うまでもなく、キリスト教教育の基礎を築く役割を果たしている。図5の写真資料によると、幼稚園が始まる前の中高のクリスマスの祝いに際して生誕劇が行われていたこともわかる。馬小屋やレンガ作りの家など舞台美術にもこだわりがみられる。



図5（左）「生誕劇の様子」推定1950年～1960年頃 清水安三記念プロジェクト写真資料

図6（右）「生誕劇の様子」推定1950年～1960年頃 清水安三記念プロジェクト写真資料



「生誕劇の様子」学園史編さん室所蔵資料

図7（左）1984年 図8（中央）中央1984年 図9（右）1993年

鶴見書で「限界芸術の作家」とされている宮沢賢治の「注文の多い料理店」の話は、当時宮沢が教鞭を執っていた高校でのクラス劇の脚本だった。このような学芸会のような催しの中にも、後の文学作品となるものが生まれることもある。生誕劇は、脚本こそ世界共通であるものの、装飾品や園児たちの演技によって、それらの日本的な解釈と表現によって独自のものとなる。祝祭性を兼ね揃えながらも、独自の大道具、衣装によって彩られる生誕劇は一つの文化を成している。筆者のように特に基督教の幼稚園に関係する機会のなかった者にとっては目新しく興味深く思えるのだ。

2-2 体育祭

体育祭に関する資料でも興味深いものがある。体育祭においては様々な魅力的な催しが行われているが、特に文化として高まりをみせているものを紹介する。体育祭は、現在は中高と大学は別々に行っているが（1960年代から短大と別日で行っている）、以前は合同に行っていた。

他の大学史の資料でも仮装行列の行事の様子は見られるが、桜美林学園において興味深いのは、学園の創立者である安三自身がみずから仮装しているものである。それも、1章で見たように過去の自分自身に変装するものに始まり、水戸黄門、明治天皇など、自身の元々の容姿を生かした仮装を行っている。



図10（左）体育祭での仮装〈水戸黄門〉1972年 学園史編さん室所蔵資料



図11（右）体育祭での仮装〈明治天皇〉推定1970年頃 学園史編さん室所蔵資料

当時の学園広報誌の『復活の丘』によると、仮装行列は「例年の呼び物で大変人気であった」という。1959年の体育祭で、クラス対抗による仮装行列の順位が一位だった二年B組（中学か高校か不明）による「日本の素顔」では、「岸首相からボス、日教組、傷痍軍人までいろいろと日本の本当の姿を表したもの」であったといい、社会風刺の要素も強い内容であったことがわかる。それに対応する図版資料に決定的な裏付けがなかったため、仮装についてわかりやすいとして「西遊記」の仮装を紹介しておく（図12）。おそらく写っている少年たちは中学生と推測されるが、「西遊記」というテーマの選択も、中国に由来する桜美林学園らしさを感じさせる。また、図13のように和服姿に仮装し、安三に卒業を請う内容のプラカードを持っている女学生の写真も残されている。

また仮装ではないが、教職員と見られる人々がパン食い競争をしている写真も多数存在し、こ

れらも興味深い（図14・15）。パン食い競争自体は、どこでも行われることではあるが、この時代の写真で（推定1950年～60年代）、出場者のここまで決定的な表情を捉えた写真は貴重である。また教職員までもがこのような行事に参加している点も、学園の一体感を感じさせる。この瞬間を捉えたこれらの写真群は、写真そのものが限界芸術であるともいえる。身振り・手振り・表情の面白さをここまで引き出し、教職員共々夢中で楽しんでいる様子を伝える写真は、貴重な芸術表現だ。こういった資料からも、教職員同士の関係が良好であることや、創立者である清水安三と、学生との距離が近かったことを表している。学園を知らない人にとっても、学園の雰囲気伝えることのできる資料だ。



図12（右）西遊記の仮装 1950～1960年頃 清水安三記念プロジェクト写真資料

図13（左）「絶対」体”に卒業させて下さい！安三先生」と書いたプラカードを持つ、和装姿の短大の女子学生
推定1960年頃 学園史編さん室所蔵資料



図14（左）パン食い競争 1950～1960年代頃 清水安三記念プロジェクト写真資料

図15（右）パン食い競争 1950～1960年代頃 清水安三記念プロジェクト写真資料

2-3 大学祭

大学祭は、元々「学園祭」や「Festival」などの名称で行われ、2000年頃から「大学祭」として、毎年10月～11月頃に開催されてきた。様々な部活、サークル、授業の展示など、普段の活動の成果を表現する場所であり、学生の課外活動の面白さが発揮される場でもある。筆者自身もこういった課外活動の面白い創作物を集めて、「学園祭」そのものをテーマにした美術展などを企画してきた²²。資料から読み取る限り、茶道部によるお茶会、演劇部の公演、ファッションショーなど様々な催しが行われてきた。

例えば、大学内では有名だったという「人形劇プーコア」という活動が特徴的だったので触れておく。「人形劇プーコア」は1966年に町田市の喫茶店「蘭」で誕生したサークルである。映画プロデューサーでもある宇田川東樹氏の指導もあったという本格的な部活だ²³。10年間の活動ののち、事情により解散したとのことだが、それまで学内に止まらず町田市民会館など学外でも活発に公演活動を行ってきた。学園史編さん室所蔵資料の中の総務課寄贈資料に大学祭で公演する人形劇プーコアのボジスライド資料があったため掲載する（図17）。

また、1973年に公演の「緑の翼」というオリジナル劇の音源が Web ページに掲載されていた。視聴してみると、音源のみで映像が無いので若干登場人物がわかりにくいですが、それぞれの声優のクオリティが高く、声色の違いを生かして物語が進行するのがわかり、全体のバランスが取れている。NHK「ひょっこりひょうたん島」の人形劇を思わせる。おそらく背景音楽や劇中歌も創作であり、ライブ録音にしては綺麗に録れている。ピアノとギターと歌を中心とした音楽劇といった形で、ストーリーにも世界観を感じさせる。

同 Web サイトに2010年に行われた30数年ぶりの再会の同窓会の様子の写真が掲載されている。同 Web サイトでは「参加人数は17名と人形2体」とのこと、人形を人間と同じように参加と数えている点に、当時の活動に対する情熱を感じさせる。



図16 人形劇プーコアの人形「コーヒー」1970年代 Web ページより²⁴

図17 人形劇プーコアの上演風景 1985年 学園史編さん室所蔵資料

また他にも各部活動の大学祭での発表の多様性について述べていると紙面が足りないので、次に視点を变えて大学祭の「パンフレット」について述べる。パンフレットは、刹那的に終わっていく祭の中で、唯一形の残るものである。描かれる絵からは当時の文化が、キャッチフレーズからは当時の学園の雰囲気、広告などからは地域との関係も読み取れる。よって、学園内の「文化」を総括的に眺望することのできる、非常に有効な資料といえる。

資料は、2000年以降しか学生課に保管されていなかったが、Facebook での資料収集の呼びかけによって、1978年、1979年、1981年の大学祭パンフレットを収集することができた。



図18 (左) 大学祭パンフレット 左から1978年、1979年、1981年 学園史編さん室所蔵資料

図19 (右) 「ファイナル・メモリーズ」(右ページ) 大学祭パンフレット 1981年 学園史編さん室所蔵資料

たとえば図19の1981年の大学祭パンフレットの資料であるが、編集後記が「詩」となっている。以下に文字起こしする。

～ファイナル・メモリーズ～
あなたの心の中に、
秋の足音が聴こえてくる時、
学祭はその中に溶けている

あなたの心の底に、
私を感じとってくれた時
私はあなたの中に溶けていく

秋は短い

あなたの中の私に
もう
冬のおとずれが見えてくる

かすかな思い出と、ひとりだけの静寂……………。

読んでいると少し気恥ずかしくもなるような詩だが、青春的一幕が直接的な言葉によって表現されており、自身の大学の学園祭を思い返してみても共感も覚える。また、こういった率直すぎる感情でさえも表現できるような人間関係および環境であったことも推測される。このような詩の形式をとった編集後記をひとつとっても、学園祭パンフレットがひとつの表現の場であったことが窺える。

2-4 中国語カラオケ大会

桜美林大学孔子学院では、「全日本青少年中国語カラオケ大会」を実施しており、桜美林大学孔子学院が発足した2006年度から定期的に開催されている。始まった当初は中国のTV局 CCTV が本選に取材に来るなど盛り上がりを見せた。予選を日本で行い、決勝大会が中国で行われる。本選に出場するのは20組で、中国語でポップミュージックなどの歌唱が繰り広げられ

る。桜美林大学が多くを出資しているという話だが、豪勢なステージの写真を見る限り凄い力の入れようである。日本孔子学院協議会の唯一の認定事業でもあり、桜美林大学孔子学院の軸となるイベントである。中国語を母国語としない日本人によって行われ、語学習得としても一役買っているイベントである。参加規定には日本国籍を有すること、中国語が日常使用言語でない者であること、などがある。参加人数は最大で140人くらいのエントリーがあったこともある。賞金はなく、中国に1週間観光付きで滞在できることが予選通過者の特典であるという。

カラオケ自体は日本で生まれたものと言われている。カラオケは大衆芸術である歌唱曲の模倣として行われ、カラオケボックスでは自分と身内のためだけの歌唱という表現行為が行われる。つまり非専門的表現者によって表現され、非専門的享受者によって享受される点が限界芸術の定義と一致する。中国語が母国語の者によるカラオケ大会なら、普通のカラオケ大会になってしまうわけだが、交流と語学取得を目的としているところから、中国語を日常の言語としない者が歌唱することによって、二重の意味で素人性の中での勝負となる。そして素人性を主体としながらも、舞台が豪勢であるところにキッチュな面白さも感じさせる。日本と中国の交流としても、また桜美林の歴史性に鑑みても意義のあるイベントといえる。



図20（左）中国語カラオケ大会の様子 2010年 学園史編さん室所蔵資料



図21（右）中国語カラオケ大会の様子 2013年 学園史編さん室所蔵資料

2-5 ファッションショー

芸術文化学群では、現在毎年大学祭と卒業制作展の時などにファッションショーが行われている。このファッションショーは服飾の授業で主に制作された衣服を見せるものだ。この服飾の授業の伝統は、遡れば短期大学時代に端を発している。短期大学時代は1989年より「家政科」から名称変更した「生活文化学科」が存在し、当初より服飾の授業があった。この名称変更をした頃よりファッションショーが開催されてきたと考えられる²⁵。『桜美林大学だより』によると2000年代にファッションショーも行われ、現在は生活文化学科や家政科という名称こそないが、桜美林大学旧文学部に由来する芸術文化学群ビジュアル・アーツ専修（旧造形デザイン専修）にて、服飾の授業が受け継がれている。

2007年頃より「テキスタイル演習」という授業の中で、田中啓一講師によってファッションショーが行われきた。昨今では3D映像やリミックス、光の演出などを使用した現代的な形で開催されている。これらのショーは、授業の一環として行うものと、授業外で大学祭や卒業制作展などと同時に行うものがある。

田中講師は2006年頃から桜美林大学に非常勤講師として就任し、学生によるファッションショーを牽引してきた。田中講師によるとその目的は、

- 1 制作に対する学生のモチベーションを上げるため。
- 2 服の製作にとどまらず、コーディネートや見せ方を考えさせるため。
- 3 モデルの設定、会場探し、舞台、演出、照明、音楽まで、学生たちにやらせるので、その際のチームワークを経験させるため。
- 4 ショー自体の楽しさと、何より観客の反応を経験させるため。

としている。実際に服飾デザイナーとして就職した際にも役立つ多角的な学びを提供し、学生の自主性を高める素晴らしい教育だと感じている。筆者も学生と間近で関わり、生き生きとした学生たちの姿を見て、学びとは本来楽しいものであり、「見せる」場があるからこそ真摯に制作に向かい合えるのだと実感する。



図22 (左) 短大時代のファッションショー 1995年 『桜美林大学だより²⁶』 p296より



図23 (右) 太平館ギャラリーでのファッションショー 2007年 学園史編さん室所蔵資料



図24
3D映像や光の表現を駆使した近年の大学祭でのファッションショー
けやき広場にて
2017年 YouTube 動画より²⁷

田中講師は、コム・デ・ギャルソンの元服飾デザイナーでもあり、こういった一流の教員が学生のモチベーションを高め、主体性を引き出し、毎年新たなファッションを創造している。洋服は一般的に工業製品であるが、学生が制作するファッションは流通するものではなく、いわゆる「1点物」である。汎用性は無く、その1点に掛ける想いと時間は、貨幣還元を目的としない唯一無二のものである。

限界芸術は、その見返りのない純粋な創作意欲にこそ根源がある。これらの、単純な「楽しみ」「こだわり」を追求した表現が、いずれ芸術や社会の土台を作っていく。それは本章でみた、宗教教育、語学習得、服飾など、学業にも関わる様々なものを「楽しんで」学ぶことにより、生徒・学生たちが社会に出てゆき、活躍していくからである。

3 「手作り」で紡がれる学園史

このように、祭・イベントの中でも制作物というのが生まれてきたが、本章では、学園内で制作されてきた手作りの要素の強い制作物について触れる。学園内では、崇貞学園時代から今日に至るまで、豊かな制作物が生まれている。そのなかでも特に特徴的で、限界芸術の定義に沿うものについて触れる。

3-1 崇貞学園時代の手工芸

崇貞学園が発足した地域である、当時の北京朝陽門外のスラム街では、十銭、二十銭という安価で少女たちの貞操が売られていた。安三はそれを憐れみ、彼女たちの手に職を付けさせるために手工芸をはじめとした女性教育に目を向け、そこで設立したのが崇貞学園だった。当時崇貞学園で作られていたものはハンカチーフ、靴下編み、タオル織り、刺繍のテーブルクロスやタオルなどである。少女達の高い貞操、不二の貞操を掲げて「崇貞」と呼び、少女たちに貞操の大切さを説き、そのために読み書きや手に職をつけた。安三は貧民街の少女のあまりの哀れな姿を見て、キリスト教的な貞操観念と結びついて、少女達に職業を与えてきたのだ。

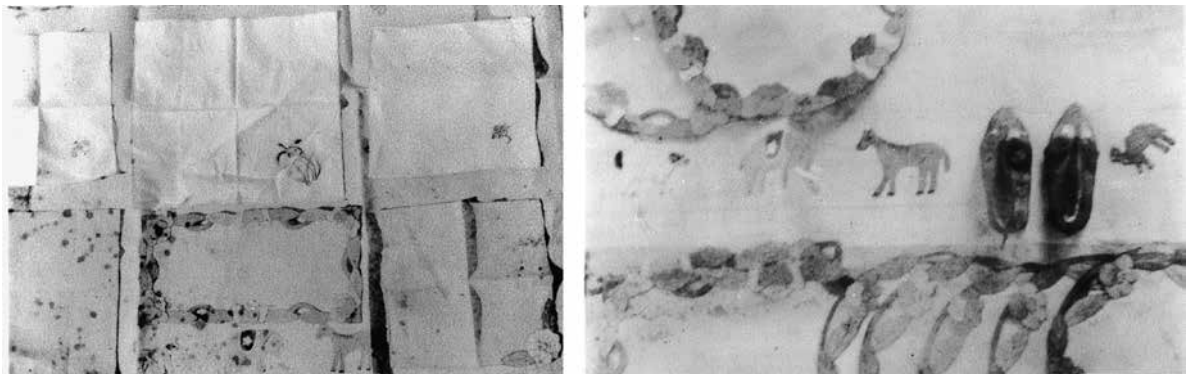


図25 崇貞学園の生徒たちによる手工芸品 年代未詳 清水安三記念プロジェクト写真資料

安三の著書『朝陽門外』によると、「今日では、朝陽門外といえは、美術工芸品の産地のようになり、一年に四百万円ぐらい生産して、南米、北米、英、仏の諸国に輸出している。」とある。宗教的理念と結びついた限界芸術が世界に羽ばたき、汎用化していった様子が見える。

3-2 わらじ教育

時は戦後に戻り、ここからは桜美林幼稚園における制作物についていくつか触れていく。桜美林幼稚園は1968年に設置された。桜美林学園全体の建学の精神である「キリスト教精神に基づく国際人の育成」に加え、「モンテッソーリメソッド」と軸とし、子ども等に多様な学びを提供している。

桜美林幼稚園の学びのなかで、特徴的なものとして「わらじ教育」という教育方針がある。児童たちの「土ふまず」を形成するねらいとして、わらじを履かせて園庭などを遊ばせるというものだ。1980年代前半に桜美林大学の阿久根英昭教授の提唱により始まり²⁸、現在も続いている。その中で、一時期（1990年頃²⁹）はわらじを園児に作らせることもあった。わらじ教育が始まった当初は本物の藁で制作していた。その当時は園近くの馬場や小山田に稲作農家が多く存在し、藁で作ってもらっていたという。世代交代で田んぼがなくなり、藁の調達が難しく

なり、また砂場遊びなどで水にぬれるとちぎれてしまう藁の性質もあり、現在は秦野の農家にビニールの荷物ひもで編んでもらっているそうだ。その珍しい教育方針からテレビ番組で取り上げられたりもしてきた³⁰。手作りのわらじは、長年保つようなものではないが、その時々園児たちの足を支え、地域の人々の手を借りながら土踏まズの形成に寄与してきた、小さな「工芸品」といえる。



図26
わらじを履いた園児たち
1989年 学園史編さん室所蔵

3-3 卒園アルバム

幼稚園教育に関係して、「卒園アルバム」の装丁が手描きで趣深い。記念写真そのものは限界芸術であるとされているが、その思い出を彩るように描かれた手作りの装丁が、年によって様々で、業者に発注したアルバムよりも家庭的で優しさを感じる。図27には掲載がないが、園児が描いたと思われるアルバムも存在する。聖書に因んだ絵が多いことも特徴的だ。



図27
卒園アルバム
(左から1991年、1998年、
1996年、2001年)
学園史編さん室所蔵

3-4 園長・安三に贈られた似顔絵

また、幼稚園に関連して、当時園長だった清水安三に贈られた園児たちの絵が残されている。1976年の安三の誕生日に贈られ、表現がまちまちであるものの安三の視覚的な特徴をよく捉えている。

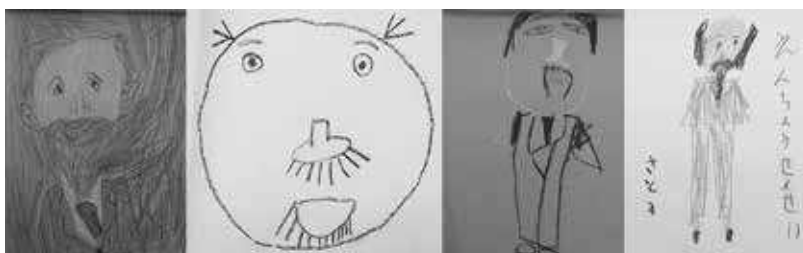


図28
安三に贈られた誕生日記念の絵
(1976年)
清水安三記念プロジェクト資料

限界芸術は、人と人との繋がりの中で、他者に与えるために「創る」という性質をもっている。マルセル・モースに始まる贈与論の文脈でいえば、芸術活動には「贈与」の行為が深く関わっている。「贈与」と「芸術」の関連性についてはこれまでもよく指摘されてきたが、簡単にいえば、他人を楽しませたり、贈ったり、見せたり、差し出す行為が芸術活動と関連しているというものである。贈与とは、贈り主から贈られ、贈られた側がそこに心理的な負債をもつことになり、返礼の義務が生じる。そしてその返礼によって、関係が続いていくという構造をもつ。ここに、贈与と対義的に使われる「交換」と違い、単純な経済活動との違いが示される。教育組織において、このような「贈与」のし合いによって歴史が作られ、様々な文化が醸成されていく。そのような関係性がよく現れている資料といえる。40年以上も前の本来であれば捨ててしまいそうなこのようなエフェメラルな資料を大切に保管していることも、桜美林学園の学園史資料の特徴だ。

3-5 桜美林資料展示室だより

崇貞学園時代、そして桜美林幼稚園における手作りのものを見てきたが、桜美林学園には学園史に直接関係する場においても手作りで紡がれるものがある。町田キャンパスのほぼ中央部に位置する、基中館の2階に、崇貞学園および桜美林学園の創立当初からの資料を展示する「桜美林資料展示室」があるが、そこでは、桜美林大学学芸員課程での博物館実習を履修している3～4学生を中心にアルバイトとして展示案内を交代で行っている。それらの学生たちが中心になって制作している「桜美林資料展示室だより」が手書きで作られており興味深いのだ。元々浜田弘明教授によって提案され、手書きでの様式を維持しながら、年に5回発行され、現在にも続く。浜田教授は前職の職場である相模原市立博物館において、『博物館建設準備室だより』という地域に向けた広報誌を発行していた。それを手書きで行っていたのが地域から好評だったことから、展示室だよりでも手書きでの手法を取り入れたという。内容は、展示室や桜美林の歴史の紹介、学芸員課程の紹介、博物館・美術館でのおすすめの展覧会の紹介が中心となっている。

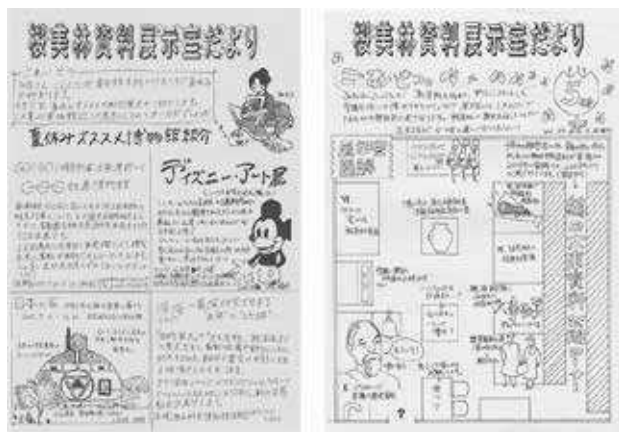


図29
桜美林資料展示室だより
(左：2017年、右：2016年)
学園史編さん室所蔵

手書きでのプロフィール、イラストにより、書いた学生の雰囲気伝わって来、また、複数人の書き手による絵柄の違いも面白い。浜田教授もこの資料を学園史編さん室に寄贈する際、「桜美林資料展示室だより」を改めて眺めながらその時々々の学生の顔ぶれを懐かしく語った。完成度も年によってまちまちでもありながら、その時学生が興味をもっていた展覧会、大学の雰囲気、展示室の展示替えなど、その時期の様子が紙面から伝わってくる。また、各課や研究

室にも配布され、筆者が学園史に興味をもつきっかけともなった。正直なところ学内に桜美林資料展示室があることすら知らない者もいるため、この刊行物の役割は教育的な意味と学内の広報という両面で重要だ。

3-6 漫画

最後に、これは部活動での制作物になるが、桜美林大学・短大美術部にて発刊していた部誌（漫画）を紹介する。2020年に私が学園史編さん室に来て、広報課が広報活動をしている大学公式の「Facebook」を使用したSNSによる資料収集により集まったものだ。当時、大学美術部には油絵・イラストなど様々な活動があったが、その一部の漫画部門のみを冊子にしたもののようだ（図30）。創刊号の編集後記には、「個性的な作品も多く、秀作ぞろい!? じゃないかと思うが、いかが!？」とあり、自信たっぷりである。ストーリーも、時代を反映させたようなものが多く興味深い。例えば限界芸術には大衆芸術の影響がしばしば現れる。そしてそれが新たな大衆芸術を生み出していく源となっていくのだ。例えば、創刊号の巻頭を飾った短編漫画「冷たい逆説」では、ある人物を殺して人工削減をするために、未来からタイムスリップをしてきた青年が、時空を越えてきたことによって、「時差ボケ」で具合が悪くなり、本来殺す予定だった人物を間違え、オーストリア大公を殺害してしまう。これが第一次世界大戦の引き金となったという、現実とも絡み合うストーリーとなっている（図31）。また、「魔法のランプ」は表紙を含め5ページの短い作品だが、細密な絵と独自のアラビア的な世界観が表現される。魔法のランプを買った貧乏な夫婦が騙されてしまうという物語で、非常にシンプルなものだ（図32）。少ない紙面であるために、短い内容で納得感のある頓智の効いた物語が描かれ、充実した内容になっている。小説の形式でいう「ショートショート」を思わせる。ストーリーや描画、世界観の設定といい、よく練られたものが多く、この部誌に対する熱量を伺い知ることができる。このように、思い思いの短い漫画が表現される部誌であったが、3巻以降が発行されたかなどは寄贈者への聞き取りによっても不明である。



図30 美術部の部誌『WHITE SHIP』
（左：1982年創刊号 右：1983年 vol. 2）
学園史編さん室所蔵



図31 「冷たい逆説」『WHITE SHIP 創刊号』
1982年11月6日発行 学園史編さん室所蔵

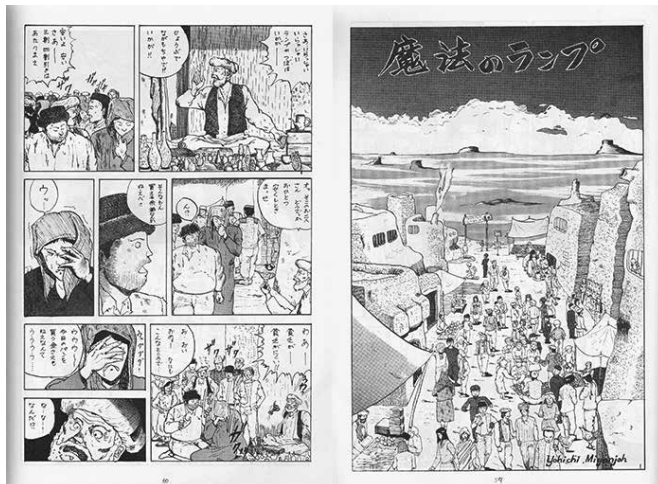


図32
「魔法のランプ」『WHITE SHIP vol. 2』
1983年11月5日発行 学園史編さん室所蔵

3-7 専門性と自由度

ここまで、授業の間や行事などで創られる様々な制作物をみてきた。最後に大学の美術部を紹介したが、片や中高における美術部は全国規模の油彩コンクール「学展」でも幾度も最優秀賞を受賞するなど、本流の「美術」の文脈においては活動がより活発といえる部活である。もちろん、これらもプロの美術家による絵画ではないことから限界芸術でもあるわけだが、今回の論文の趣旨、または私の関心としては、いわゆる大文字の「美術」の枠に沿ったものよりは、独自性や、美術の文脈に全くかすりもしないもの、純粋な興味や趣味、信仰心の元に行っているものを中心に紹介した。

これに加えて最後に総合大学である本学のなかでも芸術系の学群についても触れておかななくてはならない。本学には「芸術文化学群」という学群があり、演劇・ダンス専修、音楽専修、ビジュアル・アーツ専修に分かれている。ビジュアル・アーツ専修は、以前の映画専修が含まれている。元々この学群は、学群制に切り替わる前の文学部の中に2000年に開設した総合文化学科から始まっている。そして2005年に総合文化学群として独立し、2013年には芸術文化学群に名称変更した。その改組の度に大幅に増員しているのが特徴的だ。文学部の中の総合文化学科を立ち上げる当時、立ち上げ当時の様子を詳しく知る倉澤幸久教授の話によると、元々は哲学と芸術を融合させるというコンセプトだったという³³。そういった意味では当初は学際的な領域であったが、現在のように実技の部分が独立した形となっている。倉澤教授は「総合文化学科の初期の時代は哲学系と先生と芸術系の先生とが集まって、自由で豊かな文化の結合として花開いていた感じでとても良かった。また、その頃は学生たちが主体になって、お金や物がなくて手作りでもなんでもやっていた。その時代の方が良かったんじゃないかなと思うようなところがある」と振り返る。

現在、芸術文化学群では、演劇・音楽・デザイン・美術・映像などの各領域で将来活躍する人材が育てられるが、入学時はほとんど素人の状態で、それぞれ専門技能を身に付けながら将来の準備をしていく。そういうわけで、日々限界芸術が生まれる場所でもあるわけだが、特段鶴見の構想に近い限界芸術であると感じるのは、今回紹介したような授業外で彼らが自主的に作っているものであろう。それはカリキュラムそのものが専門性を身に付ける方向性に向いており、いくら素人による制作物といえど、その専門性のコンテキストにおける素人要素がある作品ということだからである。つまりある程度の専門的なルールがあるのだ。そういう意味で考えれば確かに、倉澤教授のいう哲学との領域が融解し、何事も手作りで行っていた頃というのが面白いというのも納得できる。もちろん専門性という意味では今の方が設備的な部分でも

実績においても向上していることは言うまでもない。

筆者は以前、芸術文化学群ビジュアル・アーツ専修の助手として、学生たちの様々な作品に接してきた。専門性を身に付ける過程における作品群はもちろん興味深いのであるが、それよりは部活動や、自主的な演劇公演、趣味での創作活動の方が、より学生たちが考えていることが反映され、成績への反映などといった見返りなしに制作されていることが伝わり、心躍らせるものであった。それは、授業で身に付けた専門性を、自主的に授業外で発表するという、社会での活躍の第一歩が現れていたからであろう。

おわりに

学業、部活動、祭などといった切り口で、そこで生まれてくる限界芸術と呼べるものを紹介してきたが、本学園は、創立期から現在に至るまで綿々と豊かな文化に彩られてきたことがわかる。それは創立者・安三の発想力とユーモアに見たように、変わらぬものいえる。崇貞学園、桜美林学園を通して一貫した宗教的な寛容性と、多少の冗談や間違い、嘘などを受容する雰囲気は個人の興味を追求しやすい環境として連続しているといえる。冒頭に、安三と「限界芸術」の概念を提唱した鶴見の遠巻きの関わりについて簡単に触れたが、彼らや孤児院にも寄付を行ってきた大原孫三郎、そして鶴見の研究対象でもあった柳宗悦も含めて、彼らの根底に共通するものは、「端(marginal)にあるもの」に対する優しいまなざしである。安三のキリスト教的な慈愛や精神性は、本学の学園史において「贈り物」や「周りを楽しませること」、祝祭性、コミュニティ形成といった形で表されていた。また、教育的な意味合いを深くもった手作りの制作物(わらじや、「桜美林資料展示室だより」など)にも見出すことができた。そういった意味でこの学園における文化を「Marginal Arts」という視点で見たことには意義があった。

また、大学に限って現実的な話をするならば、昨今少子化により、18歳人口の減少傾向が続き大学全入の時代に拍車をかけている。その中で大学を選ぶ時、将来の職業に結びつくかどうかといったところは受験生にとって非常に重要であるが、大学とはカリキュラム以外でも様々なものに出会い、感化されて新しい価値観に出会う場所である。そのため、独自の教育方法に加え部活動や独自の課外活動が充実していることは大きな魅力となる。あらゆる教育組織における学園史のなかで作られ消えていくエフェメラルな創作物たちが、いずれ、社会的に活躍していく研究者やプロのアーティストを生み出す土台となる。事実、桜美林の卒業生では、牧師に始まり政治家、プロの歌手、声優、芸能タレント、アスリート(K-1、野球選手、サッカー選手、レーサー、パラリンピアンなど)、声優、お笑い芸人、著名な劇団「マームとジプシー」の創設者、画家、服飾デザイナーなど幅広い分野で活躍する著名人を輩出している。そういった幅の広さは、清水安三が作り上げた寛容性と自由な校風の中から誕生した。

またこういった実益的な部分以外でも、学校という一つのコミュニティにおいて、その特殊な関係性のなかから生まれてくる創作物を、一つの文化史としての位置づけをしていく作業、他校との比較、カルチュラル・スタディーズ的な視点や学校アーカイブズという視点でも着目していくことで、文化生成のための一つの土壌としての、学校で生まれる「限界芸術」の役割が見出されるのではないかと考える。

謝辞：本論の執筆には卒業生の資料寄贈者様、孔子学院の秋元様、桜美林幼稚園の先生方、SNSでの資料収集にご協力いただきました広報課、学園史編集委員会の先生方、そして学園史編さん室のスタッフに多大なるご協力をいただきました。ありがとうございました。

- ¹「崇貞学園」の表記は創立当初は「崇貞工読学校」で、後に「崇貞学園」となったが、本論においては「崇貞学園」の表記で統一する。
- ²本論における「限界芸術」に関する引用は、鶴見俊輔『限界芸術論』第3版 勁草書房、1972年より行う
- ³小学校に限定していえば、筆者による「小学生の自由帳に描かれたもの：学習、生活、遊びの境界で」『桜美林論考 人文研究』第9号、2018年 では、学習時間の中で制作される自由帳と呼ばれる無地の学習ノートに描かれる落書きを中心に、教育機関における限界芸術について触れたことはあった。
- ⁴前述『限界芸術論』p37～70「限界芸術の創作」の項による検討
- ⁵前述『限界芸術論』p182
- ⁶清水安三『支那の心』隣友社、1941年 p3
- ⁷清水畏三編『清水安三遺稿集：石ころの生涯』学校法人桜美林学園 第5版、2003年 p46
- ⁸前述『清水安三遺稿集：石ころの生涯』 p274
- ⁹創立年に関しての考察としては、太田哲男著『清水安三と中国』（2011年）、小林茂著『東支那海を越えて：清水安三先生の前半生』（2011年）、などに詳しいが、それらを総括して比較・考察しているものが、姜成山著「崇貞学園創立年に関する一考察」（『清水安三・郁子研究』5号）である。姜著においては1921年創立説の立場を取るが、1920年に創立したという安三の記載も無視できず、傍証資料を固めながら今後においても史実を明らかにする必要があると結論づけられている。
- ¹⁰ハル・フォスター「アーカイブ的衝動」『Я（アール）：金沢21世紀美術館研究紀要』金沢21世紀美術館、2016（6）（訳：中野 勉）2016年
- ¹¹前述『限界芸術論』p159など
- ¹²『木槿の花の咲く頃：崇貞学園の清水安三先生』学校法人桜美林学園編・発行、2001年 p41
- ¹³大原孫三郎傳刊行会『大原孫三郎傳』中央公論事業出版、1993年
- ¹⁴<https://www.isl.or.jp/about/greeting/greeting.html>（2021/1/14閲覧）
- ¹⁵「双葉会」の読み方は、戦後の桜美林学園で再び行われた双葉会では「そうようかい」と呼ばれていたが（学園誌『復活の丘』第57号1961年11月1日より）、樽松かほる名誉教授による崇貞学園卒業生への聞き取りによると「ふたばかい」と呼んでいたという。
- ¹⁶清水安三『支那人の魂を掴む』創造社、1943年 p1より
- ¹⁷この旱魃の時期に関しては諸説ある。また、旱魃に関する現地調査によって、日本で大々的に資金集めをされていた反面、現地調査によるとそこまで酷い旱魃ではなかったという説も存在する（「1920年の華北大旱害をめぐって一東亜同文書院生の調査旅行報告が東亜同文書院の調査を走らすー」藤田佳久）。
- ¹⁸災童収容所はその閉鎖される少し前より、黒板や椅子机などが設置され教育活動を行っていたという報告書が書かれている。
- ¹⁹清水安三『希望を失わず』桜美林大学出版会 論創社、2020年 p182
- ²⁰大江晃世「『限界性』の芸術：内的価値、贈与、時間にむすびつけて」博士学位論文、2016年
- ²¹前述『限界芸術論』p24
- ²²展覧会「限界芸術大学文化祭」2013年10月 TransArtsTokyo2013 東京電機大学跡地にて、展覧会「藝祭100年の歴史展」2016年3月 東京藝術大学 大学美術館陳列館にて
- ²³<http://sanctuary.main.jp/pukoa/pukoa.html>（2021年2月12日閲覧）
- ²⁴Web ページより画像転載 <http://sanctuary.main.jp/pukoa/otoko.html>（2021年2月12日閲覧）

- ²⁵ 生活文化学科の最後のファッションショーが2001年1月18日に開催され、それが第12回であることから逆算して1988年頃と推測した。桜美林大学・短期大学広報室編『桜美林大学だより』第117号(2)より。この最後のファッションショーの翌年度で短期大学は桜美林大学短期大学部に名称変更となる。
- ²⁶ 桜美林大学・短期大学広報室編『桜美林大学だより』第117号
- ²⁷ YouTube 動画 youtube.com/watch?v=FXqNDo8-njk&feature=emb_logo (2021年2月1日閲覧) より
- ²⁸ 『朝日新聞』1991年6月30日朝刊より、10年前(1981年)に始まったという記述から。ただし、阿久根教授によるとそれより前に始めたような記憶もあるが、決定的な資料が無いため暫定的に1980年代としている。また、『神戸新聞』2004年1月31日記事には20年ほど前と、していることから1984年前後であるとも考えられる。しかし、桜美林幼稚園の富田恵美子教諭による元教頭への聞き取りによると、1988年に『いま子供たちの足の裏が危ない』(主婦の友健康ブックス)という書籍により話題になったことからわらじ教育が幼稚園で取り入れられたとのこと。
- ²⁹ 桜美林学園 IR・アーカイブスセンター佐藤基氏(桜美林幼稚園卒園生)への聞き取りによる
- ³⁰ 「いま子供たちの足の裏が危ない」テレビ東京 レディス4 1988年2月8日放映
- ³¹ ただし、子ども達がわらじを編むことが難しかったため、長くは続かなかったとのこと。桜美林幼稚園富田恵美子教諭による先代の教頭柿澤美代子教諭への聞き取りより。
- ³² マルセル・モースやまたジャン＝ポール・サルトルなどの著作にて。近年のものでは白川晶生『贈与としての美術』など
- ³³ 2021年1月19日 倉澤幸久教授への聞き取りより